

第二章

花咲く前の軌跡

週末が過ぎ、サブリナとモニカは大喧嘩おおげんかをした。二人とも怒りを抱えたまま学校に来了。二月末のあの煙雨えんうの朦朧とした早朝、教室はぼんやりと霞かすみがかかっていた。モニカは、

「もう絶交するーうちのところに二度と来ないで」

と一言残して去った。少女はその決然けつぜんとした背中を見て、言葉にできない苛立いらだちや憂鬱が波のように、次々と胸を打ちつけた。この重さに息苦しく感じ、心がざわざわと不安定になる。

第二章 花咲く前の軌跡

愁雲^{うれいくも}が彼女の空に垂れ込め、体ごとネガティブな感情に陥ってしまった。湿った環境に、周りの全てが温度を失ったかのよう
で、寒さが全身に沁みわたる。内心の葛藤^{かっとう}と戦いながら、どうにか平靜^{へいせい}を保とうと努めていた。一人で壁際^{かべぎわ}に立ちん坊していると、誰かがスカートを軽く引っ張るのを感じた。顔を下に向けると、ジャンナが床に座り、微笑んでいた。深呼吸をし、隣りに座って、出来るだけ相手に異常を感じさせないように返事をした。不思議なことに、数言^{すうげん}の会話で心の暗い鬱が晴れ、話しているうちにクスクスと笑えるようになった。不意に、女の子の手に触れると、その手は冷たかった。それで、自分の手に持っていたホッカイロを女の子の手の中に入れ込んだ。

「そうしたらサブリナは何を使うの？」

第二章 花咲く前の軌跡

この子は私のことを考えているー彼女は感動して頭を振り、
「私は大丈夫。コートが暖かいから。ジャンナこそ、これが必
要よ」

と、自分の温かな手で女の子のホッカイロを持った手を優し
く包み込んだ。それまで感じたことのない善意^{ぜんい}を、今度は返そ
うとした。

数日後、それは木曜日の午後。学校近くの人込みの多い
歩道橋^{ほどうきょう}で、遠くから何人かの見慣れた姿が自分に向かって歩い
てくるのを見た。ジャンナがレイラとウエンディの後ろについ
て、三人で歩いてきた。先日^{ついに}のウエンディからの追放令^{ついほうれい}を思い
出して、頭を反対側に背け、景色に夢中になったフリをして、す
れ違い、急いでその場を離れた。フェンスの隙間から伸びてき

た桜の枝には、数輪すうりんの蕾つぼみがついていた。

「どうして挨拶しなかったの？」

とエイヴリーが理解できない様子で聞いた。

「あの子たちは仲良しだし、一緒に楽しく遊んでいて、話しかけたら邪魔になっちゃうし、誰に挨拶すればいいのかもわからないし、別に挨拶しなくてもいいよねって思ってた」

「挨拶って、一言でいいじゃない？それは知っていればできるもんじゃないの？っていうか、あの人たちからも何も言わなかったの？」

「実はね、帰宅したらジャンナからメッセージが来てて、道

で会ったけど、挨拶しようとした時には、もう行ってしまっ
たって」

「行ったって、君逃げたのかい？いつものサブリーナっぽくない
ね。それで、モニカと喧嘩してから仲直りしてないんだよね。
あたしはそう言ったのを覚えているよ。なぜ喧嘩したの？」

「すごく細かいことで。すぐに仲直りしたよ。でも壊れた鏡は
元には戻らない！糊で修復したとしても、ひび割れは残る」

話がここで止まり、ため息をつき、胸に手を当て独り言のよ
うに言った。

「朝顔の生命力は本当に強いけど、深く関わりと毒に害される。
梅の見た目はよそよそしいけど、実は正直なんだよね」

これを聴いたエイヴリーは、予想通り、何もわからないとい

う顔をしていた。

歩道橋での偶然の出会いをきっかけに、二人はオンラインで盛んに話した。一言一句を交わし、誰もこの会話をやめると思わなかった。寝る前になかなか返信が来ないレイラのチャット画面が目に入ると、サブリナは送ったメッセージをすべて取り消し、重たい目蓋まぶたを閉じた。その夜で、色んなことが密かに変わってしまった。

翌日、ジャンナは教室の窓辺まどべに寄りかかり、いつもよりも重苦しそうな表情で、机の上にくいつかのお菓子を散らかしていた。サブリナが近づくと、莞爾かんじ（うん）として笑い、一袋のチョコ

第二章 花咲く前の軌跡

レート菓子を取り上げて言った。

「もし甘いものが好きだったら、こちらを貰ってください」

「ありがとう」

と少女は笑いながら受け取ると、その子の右手に包帯ほうたいが巻か
れているのに気づき、表情が曇った。

「手、どうしたの？痛そう」

と心配の声をあげた。女の子は苦虫にくむしを噛み潰したような表情
で、声を出さずに冷静に頷いた。

「その手じゃピアノ弾けなくなっちゃうね……」

少女は自分の心臓がきゅっと痛むのを感じた。

「あのね、明日なら、私は行ける……」

(1) 莞爾 にっこり微笑んでいるさま。

女の子は遊びに行くことを提案しようとしたが、少女には伝わらなかった。

「明日でピアノ弾けるようになるの？手、もう痛くないの？」

「ううん、明日、一緒にどこに行かない？まだはやい？どう？」

こう聞こえて、きつぎょう喫驚した。二人はまだ出会って数日しか経っていないからだ。しかし残念ながら、その日は他の用事があって、抜けられないので断った。でも、実際、ジャンナと一緒にいると落ち着いて安心するし、その誘いには喜びを感じていて、棚上げにしくなかった。

週末、家の近くの川沿いを散歩した。春風が川面をそよぎ、氷がだんだんと溶けて、太陽の照らしでキラキラと光っていた。

第二章 花咲く前の軌跡

日が西に沈むにつれ、寒さが戻り、川面に再び密かに薄い氷が張りついた。早咲きの桜の枝に霜が付き、月光の下では銀色の花のようだ。夜が更け、スマホが鳴った。チラリと見ると、女の子から届いた行き先を提案するメッセージだった。それに素速く返信し、この都市の有名な観光地を調べ始め、二人でさまざまな場所を訪れる姿を頭の中で思い描いた。

次の月曜日になると、一日中エイヴリーと一緒に勉強で忙しく、他の人とは顔を合わせることもなかった。放課後、少女は何かが欠けているという虚無感きよむかんに襲われながら廊下に立っていた。その目は何かを捜していて、まるで広い学校の中で方向を見失ってしまったかのようにだった。

第二章 花咲く前の軌跡

「待って、もう少し待って」

声が脳内で響いたが、何を待っているのかは自分でさえわからなかった。ジャンナが現れると、虚ろな目に方向が生まれ、すぐに近づいた。手が重なった瞬間、お互いの気持ちは通じ合った。二人は肩を並べ校門を出て、川沿いの桜並木の小道を曲がった。桜はまだ咲いておらず、薄紅の蕾が一つ一つぎっしり集まって、風の中で軽く揺れ、春の宴^{うたげ}を待っていた。二つの肩が少しずつつ近づいていった。

「どこに行くの？」

とサブリナは呟きながら尋ねた。

「散歩したいだけ。もし良ければ、一緒に歩いてみませんか？」

第二章 花咲く前の軌跡

と答えると、その瞬間、珍しく、その子の目には光と探究心が輝いていた。少女は躊躇^{ちゅうちゅう}せず^{ちよ}に了承した。その日の風は特に強く、髪を空中で乱舞^{らんぶ}させ、顔を覆った。制服のプリーツスカートが歩みに合わせて前後に動いている。その一時、まるで時間が止まったかのように、彼女たちは桜の木の下を目的もなく、ただひたすら歩き続けた。

数日後の体育の授業で、レイラが控え選手になった。同じく控え選手であるサブリナは、うれしそうにそばへ行くと、彼女から

「ちよつとほつといてくれる？ スマホ見たいから」

という淡然^{たんぜん}とした一言を受け取った。拒絶されたので、喉^{のど}

(2) 淡然 あっさりとしている様子である。

第二章 花咲く前の軌跡

まできた言葉を呑み込まなければならず、一人で隅に行き頭を掻^かいていた。モニカが歩いて来た。なぜなら、その時二人はすでに仲直りしていたからだ。

「ねえ、レイラって私のことあんまり好きじゃないみたい。近づいたらすぐスマホを見始めるんだけど」

と落ち込んだ声で言った。

「ずっとそう思ってたよ！でもあいつのことなんか気にしなくてよくない？」

「確かに。友達って、誰じゃなきゃダメってわけじゃないもんね」

この言葉は、少女が自分に言い聞かせるようにも聞こえた。下校のチャイムが鳴り、その日の授業がこれで終わりだと意識

第二章 花咲く前の軌跡

した二人は、一緒に意気揚々と帰りの駅に向かった。先日の争いの不快感を忘れようとした。事実上、彼女たちはそれができ、一ヶ月をかけて、ますます親密になった。改札に着いた時、サブリナは教科書を学校に忘れてしまったことに気づき、仕方なく取りに戻らなければならなくなった。二人はそこで別れた。

途中、駅の前の歩道橋ほどうきようを通り抜ける間、ジャンナが向かい側から歩いてくるのを見かけた。運命とは面白いもので、前回もこの歩道橋で会遇かいぐう(3)した。その日も木曜日だった。しかし、先週あと違うのは、今回彼女が一人だったことだ。挨拶するかどうか迷っていると、相手が先に声をかけてきた。

「えっ？サブリナ、どうして戻るの？」

(3) 会遇 偶然会うこと。

顔に艶め^{なま}かしく面映^{おもは}ゆい表情が浮かんだ。そして真実を告げた。

「じゃあ、一緒に行こう。私にとっては散歩みたいなものだから」

誘いを断らず、ジャンナの手を取ろうとしたら、相手は反射的に袖口を指で掴んだ。道すがら、普段の生活についてあれこれと話をした。小川^{おがわ}のせせらぎと喜鵲^{カササギ}の賑やかな囀^{さえず}りが、楽しみを一層盛り上げてくれた。別れの交差点で立ち止まり、シマウマの向こう側の信号が何度も色を変えているのに、二人はなかなか去ろうとしなかった。それからの日々、サブリナは何度もジャンナに会いに行こうと思ったが、自分が一方的に思い込んでいるのではないかと心配で、自尊心^{じそんしん}から行動に移すことを

ずっと避けていた。

月日は流れ、三月中旬になった。朝日は勢いよく昇り、柔らかな光が地面に落ちて広がって、大地に梔子色^{くちなし}のヴェールを纏^{まと}わせた。校舎の真ん中で、時計の針はゆっくりと動き、時間の経過を告げていた。ある休憩時間、モニカが洗面台で髪を梳^とかしていると、予期せぬ客が飛び込んできた。その人は鏡の前まで直行し、独りを楽しむように口紅を塗り始めた。クリミーで質感のふつくとした唇を滑り、梅紫^{うめむらさき}の色は真っ赤ほど熱烈的ではないが、雪のように明るく透き通る肌を引き立たせ、まるでオーラ全開の女王のようだ。幽遠^{ゆうえん}な瞳にモニカは息

(4) 梔子色 日本の伝統色、クチナシの実で染めた濃い黄色。

第二章 花咲く前の軌跡

をのみ、思わず後ずさりして、壁に全身を押し付けた。それはレイラだった。圧倒的な秀麗^{しゅうれい}さだが、時々身がよだつような感じを抱^{いだ}かせる眼差^{まなざ}しがある。だから「氷の美人」というあだ名が生まれたのだ。

放課後になると、ジャンナとサブリナは廊下で会い、一緒に階段を降りて、校門を出たところで立ち止まった。ジャンナは二人の帰り道が実は完全に違うことに気づき、

「スクールバスに乗るなら右に曲がるんだよね？」
と確認した。

「そうなんだけど、でも今日は……………」

少女はすでに電車に乗ろうと考えていたが、文が終わる前に相手が右に曲がったのを見て、急いで後を追った。

第二章 花咲く前の軌跡

「駅に行くなら左から……私のためにわざわざ遠回りしなくていいよ」

「大丈夫。前に何度も私に付き合ってくれたから、今度は私がバス停まで送ってあげるよ」

彼女はそれ以上、止めず、来月に学校で計画されている遠足の話を始めた。目的地は海^{うみ}辺^べの小さな町^{まち}だった。

「大^{たい}洋^{よう}の向^{むか}こう側^{がわ}は、私が日^に夜^や憧^{あこが}れる故郷^{こきょう}があり、見えるはずはないと知^しっていても目を凝^こらして眺^{なが}めたい。目^めの中^{なか}で、海^{うみ}は緑^きから青^{あお}へと変^かわる水^{みづ}墨^{すみ}画^がのよう^{よう}に色^{いろ}溢^{あふ}れる。花^{はな}のよう^{よう}に咲^さく波^{なみ}、起伏^{きふく}するうねり、星^{ほし}のよう^{よう}に散^ちりばめ^められた水^{みづ}滴^た……」

と女の子は独^{ひとり}り言^{こと}のよう^{よう}に語^{かた}り、遠^{とほ}足^{そく}に對^{たい}する憧^{あこが}れを隠^{かく}そう^{そう}ともしなかつた。サブリナは聞^きいていて、少^{すこ}し期^き待^{たい}が持^もたれて

第二章 花咲く前の軌跡

きた。

バスに乗るのを急いだのは、スクールバスのエンジンが「ブーン」と大きな音を立て、出発を予告したからだ。バスに乗り込むと、窓側の席を探し、窓枠にもたれかかって、その後ろ姿が悠々と遠ざかるのを見送った。心に暖かい泉が湧き上がり、思わず破顔した。ジャンナの足取りは急ぐこともなく、リズムに乗っていた。周りの木々が風に揺れ、太陽の光が葉を通して地面に作った斑点の影が踊る。女の子の姿は徐々に草花に隠れ、最終的に小道の曲がり角で消えてしまった。残された、たった一片の緑の葉だけが、静かに地面に舞い降りた。